

小児期発症炎症性腸疾患患者の理想的なトランジションを目指して

研究分担者 清水俊明 順天堂大学小児科学 教授
研究協力者 熊谷秀規 自治医科大学小児科学 准教授

研究要旨：

小児期発症 IBD 患者のトランジションにおける成人診療科側の問題点や課題を明らかにして、より良い治療と管理が継続されるよう検討し、体制を構築することを目的とする。まずは、成人診療科に対してアンケート調査を行う。その結果を踏まえてマニュアルを作成する予定である。

共同研究者

内田恵一（三重大学小児外科）
国崎玲子（横浜市立大学市民総合医療センター炎症性腸疾患センター）
杉田 昭（横浜市立市民病院炎症性腸疾患センター）
大塚宜一（順天堂大学小児科・思春期科）
新井勝大（国立成育医療研究センター消化器科）
窪田 満（国立成育医療研究センター総合診療部）
田尻 仁（大阪府立急性期・総合医療センター小児科）
鈴木康夫（東邦大学佐倉病院 消化器内科）

科）で行われているのか、アンケート調査を行って現状を把握し、また日本小児栄養消化器肝臓学会が作成した「成人移行期小児炎症性腸疾患患者の自立支援のための手引書」について成人領域の先生方からのご意見をお伺いする。

2 年目：頂いた手引書に関するご意見とアンケート調査からわかったわが国における IBD 患児のトランジションの現状から、海外の現状も参考にしながら理想的なトランジションのマニュアルの作成に着手する。

3 年目：マニュアルを完成させ、その有用性を検証していく。

（倫理面への配慮）

アンケート調査項目等、研究にあたっては順天堂大学医学部の倫理委員会で承認を得て実施する。

A. 研究目的

現在、小児期発症 IBD 患者は、小児科医・小児外科医または内科医・外科医によって診療が行われているが、小児診療科医が診ている患者をいつの段階で、またどのような方法で成人診療科医に引き渡す(トランスファー)かは、施設や患者によって様々である。そこで小児期発症 IBD 患者のトランジションの実情を把握し、小児期発症の IBD 患者がより良い治療・管理を継続できるよう検討し、体制を構築することを目的とする。

B. 研究方法

1 年目：小児期発症 IBD 患者のトランスファーが実際どのように成人診療科（内科・外

C. 研究結果

「成人移行期小児炎症性腸疾患患者の自立支援のための手引書」が、日本小児栄養消化器肝臓学会のホームページ、および小児慢性特定疾病情報センターのホームページで公開され、第 44 回日本小児栄養消化器肝臓学会や第 8 回日本炎症性腸疾患学会

でも紹介した。

成人診療科を対象とした一次アンケート調査用紙案が完成し、倫理委員会で承認を得られ次第調査票を送付する。

D. 考察

研究は緒に就いたところである。まずは、トランジションの成人診療科における問題点や小児診療科へ求めるものなどを明らかにする。

E. 結論

成人診療科に対し、一次アンケート調査を行ったうえで、二次調査を行い現状の把握と課題を明確にする必要がある。

F. 健康危険情報

該当なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

該当なし。

2. 学会発表

- ・ 熊谷秀規ほか. 成人移行期小児炎症性腸疾患患者自立支援のための手引書. 第44回日本小児栄養消化器肝臓学会. 福岡. H29年10月.
- ・ 熊谷秀規. IBD診療における小児から成人へのトランジション. 第8回日本炎症性腸疾患学会. 東京. H29年12月.
- ・ 熊谷秀規ほか, 移行期小児炎症性腸疾患患者の自立支援のための手引書: 日本小児栄養消化器肝臓学会編. 第14回日本消化管学会総会学術集会. 東京. H30年2月.

H. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし